佐麻多度神社（さまたどじんじゃ）　　佐藤　良士

高安山山麓の大字山畑に、式内社佐麻多度神社が鎮座している。静かな境内には他に山畑神社と高安天満宮の二社が合祀されている。無人の社務所においてあった当社の由緒書から、三社の歴史を辿ってみたい。

佐麻多度神社　　祭神は佐麻多度大神。創建時は高安山中腹の谷口天神山にあった白華山観音院の寺領内に鎮座するとあり、約１４００年前と伝えられている。明治５年の神仏分離令で寺は廃絶、佐麻多度神社は村社に列し、山畑神社と合祀、明治３２年に現在地に遷された。

山畑神社　　祭神は高坐御子神、平安時代の清和天皇の御世、山畑村の福寿院宝積寺内に鎮座、明治３２年佐麻多度神社に合祀、現在地に遷された。古くからの山畑村の守護神で「高安明神」と称し、崇められる。

高安天満宮　　佐麻多度神社と共に約 1400 前に山畑村天神山に天の神として祀られ、御霊信仰と結びついた。佐麻多度神社と同時に現在地に遷された。

太鼓台と夏祭り　　７月の山畑の夏祭りに担がれる太鼓台（ふとん太鼓）の掛け声が「チョーサアジャ、ヨーイャサッシャ」で、この掛け声は、狂言「千鳥」で太郎冠者が祭見物で神輿を引く掛け声と同じである。
また、この山畑地区には、謡曲「弱法師」の峻徳丸伝説も伝えられており、能、狂言とこの地域の結びつきの深さを感じさせる。

立石（おうと）越　　境内から山側の道に常夜灯がある。立石越に繋がる道である。立石越は、大阪天王寺から、平野、久宝寺、八尾ときて、満願寺に入り、東高野街道を渡って服部川から高安山の北の立石峠を越える。大和では信貴畑（信貴山の北）を経て勢野で竜田道に入り、三室、竜田から法隆寺に向う道である。山畑の村を抜けて山道を登りだした七曲がりの辺りに巨岩があったことから、この名前が生まれたらしい。江戸期の旅行家の貝原益軒の文章に、「立石越は十三越の北也。河内の方より登る道に大なる立石あり。道けわし」とある。現在はハイキング道になっているが、道中、昔を忍ぶよすがとして道標や石仏が多い。

谷口天神山　　佐麻多度神社が創建時に鎮座したという谷口天神山はどこにあるのか。高安山中腹と神社の由緒書にあるからおそらくこの山麓から見えたはずである。そこは谷側の水源に近く、旱魃時にも水は涸れなかったという。

　高安は遠い昔に渡来人が住み着いた所と言われている。「たかやす」という地名は渡来人がつけたのであろうか。もしかしたら「佐麻多度」というのは人の名前で、彼らの長になった人の名前だったとしたらどうだろうか。高安山中腹の谷口天神山に彼の館を置いたとしたら、古代の高安の風景が見えてくる……。

斑鳩の高安村　　奈良の斑鳩に「高安」という集落があり、そこの鎮守の社の解説板には、次のような村の由緒書と伝説がある。

「高安集落と業平伝説（顔に墨をぬる話）　……またこの村は伊勢物語で有名な平安の歌人在原業平（８２５－８８０）が、河内の高安の恋人である河内姫のもとへ通った時に、立ち寄ったといいます。この時村の美人は、美男の業平に連れて行かれるというので、娘は顔に鍋墨をねってわざとみにくい姿にしたという伝説も残されています」

　この業平が通ったといわれる道は「業平道」呼ばれ、天理の櫟本（いちのもと）から、大和郡山、安堵、斑鳩、紅葉で有名な竜田川を経て、平群から高安山を越え河内の高安に続いており、途中には竜田川や三室山、法隆寺や竜田神社など多くの歴史名所がある。この道は古代の官道の北横大路に沿っており、恐らく中世以降、業平道と呼ばれたのであろう。斑鳩の高安村は河内の高安に住みついた渡来人が山を越えてやってきたのであろうか。河内の高安と大和の高安を繋ぐ道、それは古代から近世まで多くの旅人が通った道に違いない。

再び、佐麻多度神社の境内で（ある歴史マニアの呟き）　　由緒書にある高安天満宮の記事は嘘でしょう。これは多分、佐麻多度神社が合祀された時に、三社合祀にするために人気のある神社の名前を借りただけで、いわばブランド品です。

　山畑神社も遷されてきたというのはおかしいですね。古くからの山畑村の守護神とありますからね。山畑村の氏神で、もともとここにあったんじゃないですか。

　佐麻多度神社が 1400 前に高安山の中腹に創建されたというのは本当です。1400 年前というと聖徳太子の頃、おそらく当時、この高安山の中腹から山麓にかけて多くの渡来人の集落があって、もっと違った風景が展開されていた。

　そして時代は移って、河内や大阪に人々が移って行った時、この渡来人の集落は朽ち果て、山腹は雑木林に変わり、何時しか忘れられてしまった佐麻多度大神を、この村の人々が自分達の神として勧請したのではないでしょうか。

（参考資料）　佐麻多度神社由緒書、関西山越えの古道（ナカニシヤ出版）